例　　言

1．本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内東部遺跡群発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は、国（1,700,000円）、県（850,000円）の補助金を受け、平成元年6月22日から平成2年3月31日まで実施した。

3．調査組織

調査主体者	大井町教育委員会
教育長	小林　茂吉
社会教育課長	吉田　和子
町史・文化財係長	多田　威
町史・文化財係	坪田　幹男・桜井　信枝・高崎　直成
発掘調査担当者	坪田　幹男・高崎　直成

4．本書の執筆は調査担当者が下記のように分担した。

Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ章：坪田、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ章：高崎。

遺構図版作成は小林登喜枝、土器・石器実測図版作成は高崎があたり、土器拓影図作成には整理作業参加者全員の協力を得た。また本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。

5．各遺跡の調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏、機関よりご指導、ご協力を賜った。

荒井幹夫、今井堯、内田賢司、神木繁嘉、小出輝雄、駒井和久、笹森健一、塚田政子、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、和田晋治、　（敬称略）

埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合。

6．発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。銘記して、謝意を表したい。

（発掘調査参加者）敬称略

新井唯二、飯塚泰子、石川与一、井坪志津子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大曽根キク子、太田明代、奥村友子、遠田つる、笠原英子、金子君子、木村美和子、小林こずい、佐久間ひろ子、佐藤あい子、佐藤至一、佐藤みえ子、塩田佐代子、柴田しづ子、鈴木英子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、田村福次郎、豊島礼子、中嶋末子、中島優子、並木宗次、西山しめ子、野岡由紀子、比嘉洋子、細谷清作、松木美恵子、山内栄美子、山下一枝、弓和子、若林紀美代

（整理作業参加者）敬称略

石垣ゆき子、須藤さち子、杣木嘉図子、高橋けい子、中田藤子、中野和子

凡　　例

1．本書の図版の縮尺は、住居・土坑$\frac{1}{60}$、炉$\frac{1}{30}$、土器実測図$\frac{1}{4}$、土器拓影図$\frac{1}{3}$とした。

2．遺構図中の細数字は床面もしくは確認面からの深さ（cm）を示す。

3．胎土粒子に関する各項の規準は次のように定めた。

小礫：2.0mm以上、　粗砂：0.2～2mm、　細砂：0.2mm以下。

4．土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母末を含有する縄文土器を表わしている。

Ⅰ．経　　緯

○　調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積８kmで現在の人口は38,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80％近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、1978年以来国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整して行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設課から開発事前協議建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成元年度の調査は、下記の11箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

No	遺跡・地点名	所在地	調査面積	調査期間
1	大井戸上遺跡試掘調査（第２地点）	大井町大字大井字東台231･232	974㎡	６．22～７．20
2	西ノ原遺跡第38地点	〃　苗間字西ノ原142-2	74㎡	８．29～９．12
3	西ノ原遺跡第39地点	〃　〃　142-2	94㎡	８．29～９．12
4	亀居遺跡第17地点	〃　亀久保字亀居995-3	112㎡	９．14～９．18
5	本村遺跡試掘調査（第８地点）	〃　大井字東原134	200㎡	９．11～９．13
6	東台遺跡試掘調査（第15地点）	〃　大井字市沢577-1	600㎡	10．17～11．10
7	浄禅寺跡遺跡試掘調査（第４地点）	〃　苗間字神明後346-1	150㎡	11．15～11．25
8	本村遺跡試掘調査（第９地点）	〃　大井字東原138	200㎡	12．４
9	本村遺跡第10地点	〃　〃　172-1	500㎡	２．21～２．28
10	本村遺跡試掘調査（第11地点）	〃　〃　82-3	370㎡	２．７～２．22
11	亀居遺跡第19地点	〃　亀久保字亀居1,007	613㎡	３．12～３．26

上記の調査のうちNo.２～４、９、11は個人住宅の建設に伴う事前の記録保存の調査であった。１は会社寮建設、５は土地区画整理事業に伴う小学校グランド移設予定地の試掘調査。６は資材置場予定地、８は町のゲートボールコート予定地、10は大井・苗間第一土地区画整理事業に伴う範囲確認調査であった。このうち１、５、６については試掘調査の後、本調査に移った。７は当面の開発がないため検出遺構のみ調査した。８は遺構を確認したが、基礎工事の掘り込みが浅く地下の遺構に影響を与えないとの判断から盛土により遺構を保存をした。

また本報告書には、以上の11箇所の調査に加え、西ノ原遺跡第40地点、亀居遺跡第18地点の調査報告を、遺跡の構成をさらに総合的にとらえるために参考資料として掲載した。

Ⅳ．西ノ原遺跡第38・39地点

第16図　西ノ原遺跡の地形と調査区（$\frac{1}{5000}$）

1．遺跡の立地と環境

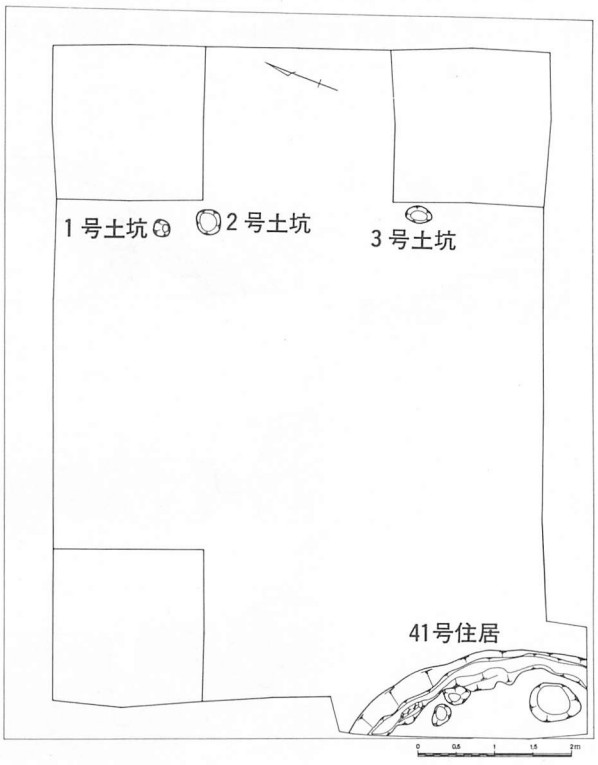
西ノ原遺跡は、さかい川をのぞむ南側の台地縁辺部に立地する。さかい川河床との比高約2mであり、海抜18～21mである。西ノ原遺跡から、さかい川のはさんだ対岸にあたる北側や、下手には、富士見市中沢遺跡があり、加曽利ＥⅠ～ＥⅡに限られた19軒の竪穴住居が検出されている。西ノ原遺跡の下流1km強には、神明後遺跡がありほとんど未発掘であるが早期～中期の遺物が出土し、中期の住居と集石土壙が検出されている。西ノ原遺跡は、これまで37地点で調査が行われており、先土器時代・縄文時代・平安時代の複合遺跡であることが知られている。縄文時代の遺物は、早期前半の井草式から後期の堀ノ内Ⅱ式までがあり、遺構は早期の炉穴・おとし穴から後期の土壙までが検出されている。竪穴住居は40棟が調査されているが、そのすべてが縄文中期であり、中期の遺跡規模は、約10haと推定されている。

縄文中期の竪穴住居は、阿玉台Ⅱ式から加曽利ＥⅡ式にわたるが、大別すると中期前半期12軒・中期後半28軒であるが、住居数・遺物量共に多いのは加曽利ＥⅠ新・加曽利ＥⅡ期である。本遺跡のうち、勝坂期の住居は遺跡の西半部に配置され、加曽利期の住居は遺跡中央では勝坂期のものと重なりつつも、住居配置は遺跡東半部に中心がある。

今回の調査地点である38・39地点は、遺跡内のうち東南部にあたる。両地点の南側の18地点の竪穴住居一軒・39地点の北に隣接する14地点の2軒はともに加曽利ＥⅡ期のものであった。

2．第38地点の調査概要

1989年 8月29日、対象地の内側50cmに調査区域を設定し、人力により表土はぎを行なった。調査地は畑地であり、トレンチャーによる深耕はあったものの遺構確認面は比較的良好に残っていた。精査の結果、調査区東側から3基のピット、南西隅から遺構覆土を確認した。南西隅を調査区域際まで広げた結果、住居と判明、西ノ原41号住居とした。また旧石器時代調査のため2×2mグリッドを3ヶ所設定し、Ⅴ層まで掘り下げたが遺物の検出はなかった。ただし表土中からは縦長剝片を採取している。全ての遺構を完掘後、測量・写真撮影を行い9月12日調査を終了した。



第17図　西ノ原遺跡第38地点遺構配置図（$\frac{1}{100}$）

3．西ノ原遺跡41号住居

形状　円形もしくは楕円形を呈すと思われる。確認面からの掘り込みは40cmと深く、壁もほぼ垂直に立ち上る。壁溝は遺構検出部で全周し、幅10～20cm・床面からの深さ30cm前後で、底面も平坦である。

床　一部貼床で、よく踏み固められ非常に固い。

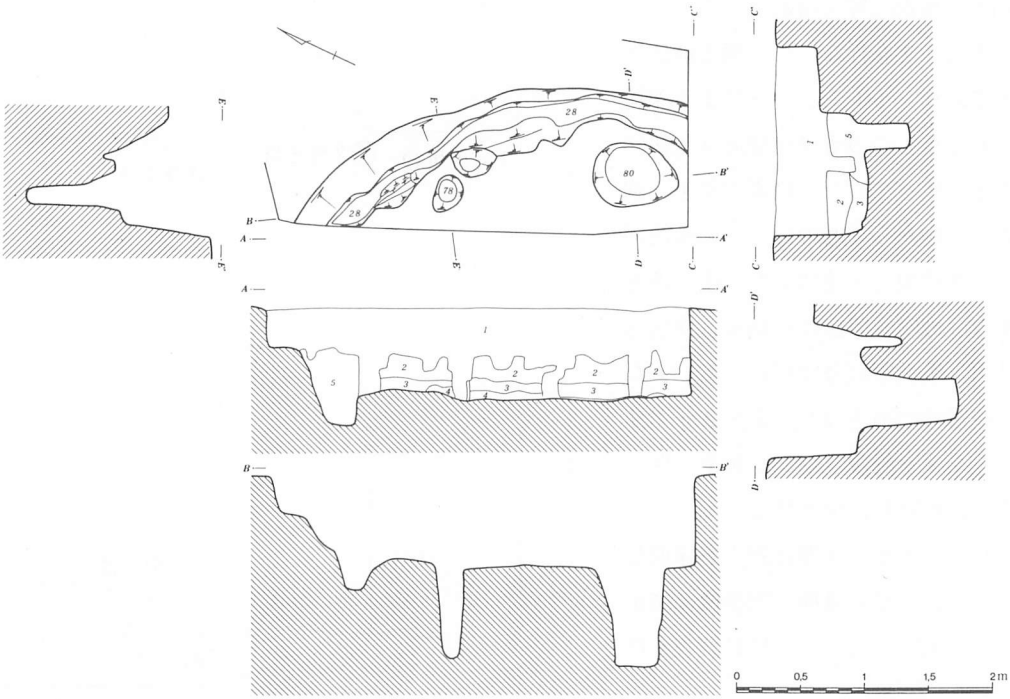
柱穴　3本検出した。P_1・P_2の覆土はローム粒を多く含む褐色土で、床面からの深さ80cmに達する。特にP_1は主柱穴と思われる。P_3は深さ15cm・浅鉢状を呈す。

時期　加曽利ＥⅠ期と思われる。土器は2～3層より出土。

4．41号住居・38地点遺構外出土土器（第20図）

41号住居は調査が北端に限られたために埋設土器はおろか床面出土は皆無であり、細片14が出土したのみである。1は小形深鉢・2は浅鉢の無文口縁部である。3・8は地文撚糸の胴部片で3は胴と口頸部区分の2条の沈線をもつ。4～6は地文縄文に沈線間磨消の懸垂文をもつ類で磨消幅は広くない。10～11は縦位の弧状条線をもつ類。3～8から加曽利ＥⅠ期新相か。

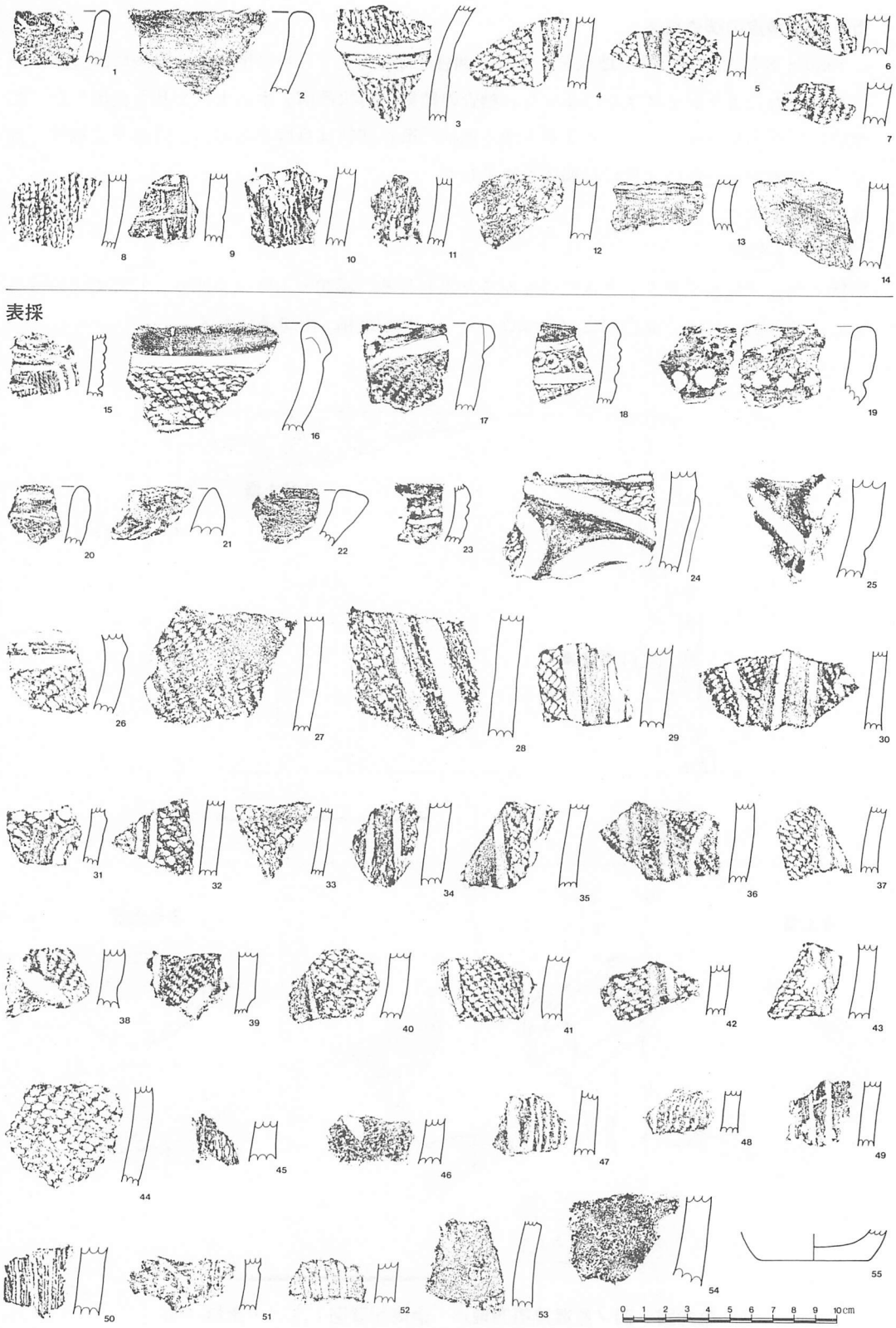
遺構外出土土器(15～55)も細片のみである。15は隆帯による縦長区画をもつ地文撚糸の胴片で唯一の勝坂末期のもの。16～22は加曽利期の口縁片で、16は口縁直下に沈線をめぐらせ、18は沈線間に円形刺突を加え、22は浅鉢である。23～25は口縁下文様帯片で24は区画隆帯をもつ。26～54の胴片のうち26～41は地文縄文のうえに沈線間磨消の懸垂文をもつ類で加曽利ＥⅡ期。47～52は条線または棒状具による縦位沈線をもつ類。53～54は無文胴片・体部片の代表。55は小形土器の無文底部片で底径54mm。遺構外土器片の大部分は加曽利ＥⅡ期である。



第18図　西ノ原遺跡第38地点　41号住居（$\frac{1}{60}$）

41号住居

表採



第19図　西ノ原遺跡第38地点　41号住居・遺構外出土土器（$\frac{1}{3}$）

1号土坑

形状　平面楕円形を呈し、底部に2ヶ所のピットを伴なう。一部溝で削平されるが残存状況は良好である。長径156㎝・短径80㎝・深さ74㎝。底部ピットは径40㎝前後・深さ20㎝で、土坑の両端に位置する。おとし穴と思われるが時期は不明。

覆土　1、2は耕作土。1の方がしまりなく暗い。3は硬く締る暗褐色土。ローム粒を多量含有。4はやや軟質の茶褐色土で、ローム粒がマーブル状に混入。5は締りある褐色土。

2号土坑

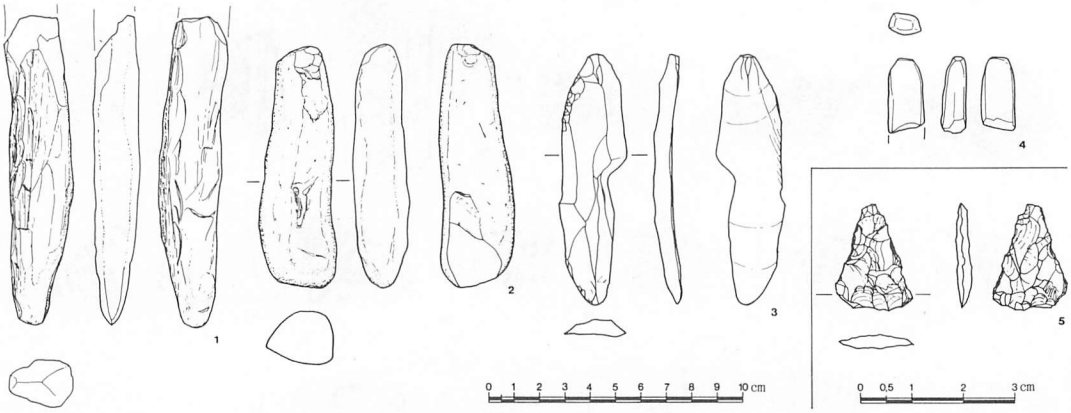
形状　不整形で長径114㎝・短径90㎝・深さ20㎝。底面は凹凸が激しい。1、2は攪乱土。3から6にかけローム粒の含有が多くなる。4には礫を含む。全体的にしまりなく、土坑出土の土器も土坑構築時の混入と思われる。

7．39地点出土土器（第22図）

1は2号土壙4層出土の胴片で、地文縄文に沈線間磨消の懸垂文をもち加曽利EⅡ期のもの。2・3は2号溝ピット出土で、2は無文胴片。3は1と共通の特徴をもつ胴片。4～14は1号溝出土で4～6は無文口縁。9は地文撚糸の胴片。14は地文縄片の胴部片を部分的に研磨した土製円板で径25㎜の小形品。15～18は2号溝出土で、15は地文条線で口縁下に2本の沈線をめぐらせた小形深鉢の口縁部片である。19～57は遺構外包含層出土で、19は渦状条痕文で時期不明。20～32は口縁部片で21は波状口縁で地文細縄文。22は地文条線で口唇直下に列点文をもつ。27～30は浅鉢。33・34は渦巻文十区画文の口縁部文様帯片。35～56の胴片のうち51は加曽利EⅢ期のもの。35～50は地文縄文、51～56は地文条線。57は底径82㎜の胴部片。

8．38地点・39地点出土石器（第21図）

1は片岩製の磨製石斧で基部を欠く。刃部は幅9㎜、両刃で蛤刃状になる。研磨は刃部と側縁稜部の一部になされる。2は砂岩製敲石で両端が欠ける。3は頁岩製のナイフ形石器で長さ99㎜幅24.5㎜。4は刃部を欠いた「のみ」状の磨製石器と思われる。側縁・主面・頭部が研磨される。　5は無茎石鏃で三角形を呈する。基部の端が片方欠ける。長さ21㎜。チャート製。



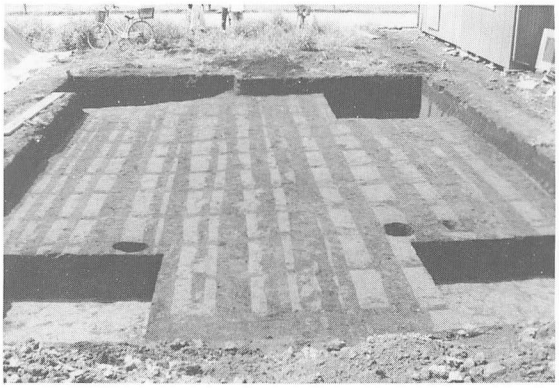
第21図　西ノ原遺跡第38・39地点　出土石器（1～4は$\frac{1}{3}$・5は$\frac{2}{3}$）

西ノ原遺跡第38・39地点

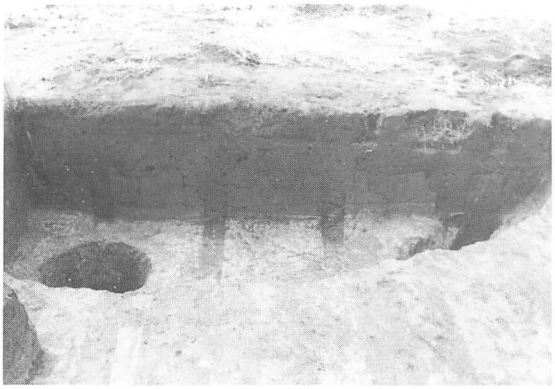
調査前風景

表土はぎ

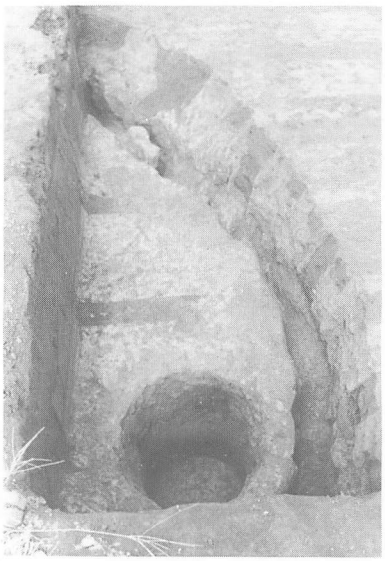
第39地点調査風景



第38地点全景

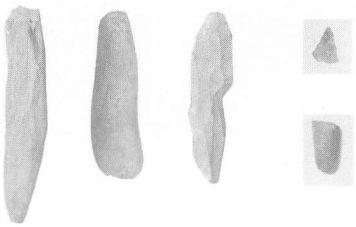


西ノ原遺跡41号住居土層断面



41号住居全景

39地点１号土坑



出土石器